

博士論文審査結果報告書

森内悠佳子

日本人フランス語学習者の筆記産出における自己訂正の分析
—メタ言語能力の観点から—

(2017年、204頁)

本論文の目的は、日本人初級フランス語学習者の筆記産出にメタ言語能力はどのような関わりを持っているかを明らかにすることである。具体的には、作文中の誤りに対する下線による間接的フィードバックに対して、学習者が自己訂正のためにメタ言語能力をいかに活用しているかを証明することである。英語教育や日本語教育では自己訂正についての研究は行われているが、ほとんどが口頭産出に関する研究である。フランス語教育においては、誤用訂正に関する研究は言語学的見地からなされたものはあるが、メタ言語能力と自己訂正の相関関係についての研究はまだ行われたことがない。研究課題自体が非常に独創性のあるテーマである。

本研究は以下のリサーチクエスチョンを明らかにすることを目指している。

- 1) 学習者の作文の誤りにはどのような傾向があるか。
- 2) 学習者の誤りと自己訂正の間にはどのような関係があるのか。誤りの多い学習者は、自己訂正も困難であるか。
- 3) 作文に対する下線に対する間接的フィードバックに対して、学習者はどの程度自己訂正をすることができるか。
- 4) どのような誤りであれば自己訂正することができるのか。
- 5) 自己訂正できない場合はどのように訂正を試みているか。

第1章では、メタ言語能力の定義を試みている。メタ言語能力の定義は研究者毎に異なるといってもよく、まして英語・フランス語・日本語と言語が異なる場合や、研究者と現場の教師との間でもかなりの差異がある。この分野の重要な先行研究をほぼ網羅的に検討し、「言語を客体化し、熟考・分析し、その形式や構造などの特性に気づくあるいは注意するという心的・認知的活動と、そこから得られた知識を意識的・意図的に運用する能力」という定義を提案している。この定義は、先行研究で提案された、しばしば断片的な定義を統括しており、且つこの概念を研究において有効に使用することを可能にする定義である。

第2章では、日本に導入された外国語教授法の歴史を概観し、筆記産出活動・能力を伸ばすという観点から各教授法の利点・欠点を論じている。意味と形式

の両面に注目することが可能になる筆記産出はメタ言語能力の発達には不可欠だからである。さらに、「初学者(A2以下)は筆記産出の際に自分の発話文にモニタリングや修正するという方略を用いることができない。」という先行研究に対して、モニタリングはA2レベルでも可能であると反論している。これは第6章の具体例の分析が十分に裏付けている。

第3章では、日本のフランス語教育における誤用分析に関する先行研究を概観している。冠詞や時制・アスペクト、語彙や連辞など、個々の研究によって取り上げた項目は様々だが、どの研究も文法的・語彙的エラー集とその原因究明、効果的な指導法という枠組みに留まっていると指摘している。

第4章では、訂正フィードバックと自己訂正についての先行研究を概観し、本研究で用いた間接フィードバックの利点を提示している。直接フィードバックを用いた場合、そもそも学習者がフィードバックを有効利用しなかったり、受動的な学習に迫りやる危険性を否定できない。作文の自己訂正には、学習者に自己自身の言語能力を内省し、言語の形式面に注意を払う機会を与えると共に、言語能力を活性化させるという利点があり、それを可能にするのが間接フィードバックであると論じている。

第1章～第4章は先行研究の考察であるが、著者は英語・フランス語・日本語で書かれたこの分野の重要な先行研究をほぼすべて検討している。検討の仕方は緻密であり、各研究についての要約・評価は簡潔で非常に明晰である。

第5章では、研究対象、課題作文、調査手順、フィードバック方法、誤りの分類方法、データの分析方法など、実際の研究方法が提示されている。理論的にも分析手順としても非常に堅実な研究方法である。

第6章では、誤りの分析結果が示されている。まず、観察された誤り（総数1088）を分析し、その種類と傾向を明らかにしている。さらに、クラスター分析により誤りの個人差を分析し、3パターンの学習者が存在することも明らかにしている。次に、自己訂正された誤りの分析を行い、全体としては56%の誤りは訂正可能であり、メタ言語能力がA2レベルでも有効に機能しているということを証明している。どのような誤りなら自己訂正が可能か、あるいは困難であるかを統計的に示した後、各々の誤りについて質的に分析し、その誤りが何に起因するか、自己訂正が困難な誤りの特徴は何かを明らかにしている。この分析では、著者の教育現場での経験が随所に見られ、非常に説得力のある分析である。

個々の誤りに対する自己訂正の分析結果は第6章で提示されているが、第7章では全体のまとめとして外国語学習における筆記産出の位置、間接フィードバックの重要性について述べている。文部科学省の英語学習者に対する調査の結果から、教室内での書く活動の比重には改善の余地があることは周知の事実

であるが、著者はさらに、言語そのものを客体化し焦点を当てやすい作文の誤りを間接フィードバックにより自己訂正させることによって、メタ言語能力を促進させ、自己の言語学習全体に対してより自立的で能動的な態度を涵養すると結論している。

<総評>

本論文は「メタ言語能力の観点から、日本人フランス語学習者の筆記産出における自己訂正の可能性を考察する」ということであるが、これは今まで誰も研究したことのない分野で、テーマ自体が独創的である。理論と実際の分析のバランスも非常に良い。理論は重要な先行研究をほぼ網羅的に検討し、その上で自分の理論を提示している。分析方法も統計的分析・質的分析双方とも非常に説得力がある。今後の研究者だけでなく、教室で実際に教えている現場の教師にも示唆に富む、非常に有益な多くの結果が提示されている。「学習者が作文をするときは既にメタ言語能力を行使しているのだから、誤りだけではなく正しく使われている場合の数・エラー率の分析が必要ではないか。」というコメントがなされたが、これは批判というよりは今後の研究に対する示唆であろう。本研究は、単に誤用訂正という分野だけでなく、日本におけるフランス語教授法の研究をワンランク上に引き上げと言っても過言ではなく、よって審査員一同は全員一致で、本論文が博士の学位に十分値するものと判断する。